

# わたしの聖戦

女性が働くということ

医学ジャーナリスト・医学博士 植田美津恵

連 241 載

## 「色っぽく」生きたい

私の見ている「赤」と、あなたの見ている「赤」は同じ色?…という衝撃的な問いかけを突き付けられたことがある。確かに、赤い色を目にした時、当然のように「これは赤」と言い、誰かがそれに同調したとしても、その誰かの赤は果たして私の赤と同じ色なのか、それを証明する術はないのである。

人類がはじめて目にした色は、海の「青」だとする学説がある。遠い昔、海で暮らしていた我々人類の祖先の目に映ったのは、その通り、青だったのかもしれない。以後、生物として進化を続ける人類にとって、文明が進

めば進むほど認識できる色の種類は増えていく。幼い頃に手にした色鉛筆のパレットに比べると、現在の色鉛筆は何と多彩なことか。ほんの短い間にも、着実に目にする色は増えているのだ、と理解ができる。

赤は、闘争の色だという。どこの国の大統領は強気の姿勢を示すとき、赤いネクタイを身に着けていることが多い。いわゆる勝負服だ。相手を説得させたい、有無をいわせないという確固とした気持ちの色で示しているのだ。

赤は勝負の色。武術の一種、テコンドーにおいて、赤い防具の選手と青

い防具の選手との勝ち負けを比較したとき、赤い防具を身に付けた選手が勝つことが多いという実験結果がある。サッカー試合でも、赤いユニフォームのチームの方がより多くの勝利を手にする傾向があるともいわれる。しかし、なぜ赤なのか。



赤い色が選手の気持ちを鼓舞するの、あるいは戦う相手が赤を目にしたときに威圧感を覚えるのか。赤い色をまとうことで、男性ホルモンが活発化するともいわれるが、確かなことはわからない。もし、赤という色にそれだけの力があるなら、プ

ロ野球の広島カープはもつと勝ち星をあげてもいいはずだ。が、実際はそうではないので、ことはそれほど単純ではないのだろう。

驚くべきことに、皮膚にも色を認識する力があるという。ある実験では、20人の実験者に目隠しをし、赤い紙と青い紙を触らせ、「赤い方はどちらか」と質問したところ、半数以上が正解したという。選択肢は2つなので、当たる確率は50%、これだけではものがいえないが、別の研究では、皮膚にも眼と同じように光を区別する「オプシン」という3種類のたんぱく質が存在し、皮膚で色を感じることができるとわかった。原始的能力が削がれている現代人の皮膚にまだそれだけの力が残っているとは、少しホッとするような、誇らしい

ような気持ちになる。それにしても、他国の

人々に比べ、日本人の服の色は暗く沈みがちだ。先ごろ見かけた南米系の人々の服は、びっくりするほどの原色でカラフルなもの。他人の目を意識する国民性といえども、日本は日本人は慎ましく、控えめすぎるきらいがある。

超高齢社会を迎えた今、私は高齢の方々に向けて、もつと色のある日常を送って、と訴えることがある。それは「装い」への提言に他ならない。無難な黒やグレーではなく、黄色や赤、緑やライトブルーなど華やかな色の服を着て欲しい、という意味だ。それはきっと、残りの人生を明るく生き生きとかけになる。高齢だからと卑屈にならず、もつと自信を持って生きて欲しいという願い。わが身も高齢となった私なりのメッセージ、キーワードは「色っぽく」生きる、である。

イラスト・伊藤香澄